
All is well that ends well.

J I N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A l l i s w e l l t h a t e n d s w e l l .

【著者名】

N Z N

【作者名】

J I Z

【あらすじ】

名も泣き一人の少年の挑戦といえば聞こえがいいかもしれない、18年間ベットの上で過ごしてきた退屈な人生、毎日毎日勉強という名の時間つぶし
しかし、そんな俺にも誰にも言つたことが無いことがまさかそれが現実になるなんて

始まりは終わりへの一步

「終わり良ければ全て良し」、「この言葉を聞いてある人は、果たして本当にやつなのだらつか?、そんな些細な疑問を浮かべる

生きてることに意味を持たない、ただベットで横になつて18年苦しみと絶望の18年間

そんなやつが、あの言葉に疑問に思つている
もう終わりしか来ないのに……

「おはよウジヤセコモス、 、 起きてますか?」

「ああ」

「聞こえない、聴こえづら」と言つた方がいいのかそんな声が聞こえた
「さつさと起きてくださいよ、着替えを済まして、それから……」
あとの一言葉は覚えてない、こんなの俺じゃない、こんなの夢だ……
俺はいつもベットの上でしか生きていけない、生きてちゃいけない
人間なんだ

「だらしないな、 、 つたら私の話聞いてるの?」

まだ続いている、いい加減にしてくれ、これは俺の世界じゃない!
目を覚ませ

チャイム音

やつぱり「うなるのか、恐る恐る目を開けて見えるのは白い天井
18年間見続けている絶望の色、吐き気がする
体は動かない、まだ意識だけが起きている状態だった
なんて融通の聞かない体だ、まるで幽霊が自分の体を見ているかの
ようだ

「おはよう」「やあます」

いつも聴いている声、これは夢なんかじゃない別に安堵しているわけじゃないが、こいつ以外喋ったためしがない

「体がうごかねえ」

「それはいつものことでしょう?」

まったくその通りだ、うだうだ言つのは止めにしよう

「あなたの体が動くのは後30分後くらいかしら、それまでにいくつか質問するね」

「はいはい」

質問とは、俺の名前、年齢、地元、その他記憶に関する質問ばかり。こいつやつて喋つてる時点で質問なんか要らないと愚痴をはいてみたときもあつたが、体が動かないんじゃしょうがない、質問に答えるしかない

「夢は見た?」

「見てない」

この質問だけは嘘をつく、説明するのが面倒なのとこれは昔から覚えていることだから

「もうすぐ体が動くから、好きなようにしていいわよ」

「やつとか」

また天井、考てるときは天井を開じる癖があるから見なくてもいいが、その癖はこの天井を見たくないから勝手に作った癖かもしれない

「お……」

体が動いた、ベットから起き上がると思ったが現実はそう甘くない、最初にベットが動き、背もたれの様な感じで体を起こすように起き上がる、動くのは手だけ、テーブルの上のパンを掴む

「いただきます」

食べ物を口の中に入れる、いつもと変わらない味、でもなぜか飽き

ることの無い味もある

ג' ינואר ۲۰۱۷

そういうと田の前の食器が片付けられていく、ベットがまた動き出す

「今日はモーターに移つてこないと勉強しきりやね」

仰向けの俺の目の前にモニターが迫ってきた、内容はいたつて普通……じゃないか、俺の年なら普通は大学受験の勉強だろうな、しかし、俺の目に映っているのはそんなものとはかけ離れたものだと自信を持つていえる、こんなもの18歳でやるもんじゃない

毎日その繰り返し、俺の喋った内容をあいつがメモし質問して、終われば別に奴にそのメモを渡す、あれにはいつたい何が書いてあるのだろうか、聞いてみたけど教えてくれない、

「なにほーつとしているの？」彼方らしくない

別に

退屈すぎるとか言つて、何倍もの量になるから俺は絶対に言わなければいけないとしている、昔言つてしまつたからな

「はい、今日は新しさ感じるも」

俺に解けない物など……

「ああん！？」

100

なんだこれ……俺に喧嘩でも売っているのか？

「どうして、おまえのくも癪だな、どうしよう。

俺の声には気付いてないらしい、不幸中の幸いだ

「ちよつと驚かせてくれ」

「珍しいわね、」の文章のロシア語に訳すくらい出来るでしょ?」

(何言つてんだ) いつ? そんな問題……

田の前にある問題を何度も書いていない、あるのはたつた一行、だが……

「あのや」

「今日はおかしいわよ、どうかしたの？」

「プログラムは絶対だよな？」

「その通りよ、さつさと始めなさい」

相変わらず俺に今日に無しだな、いいだらう、その態度がこのような結果になることを知らないクズなのだから

「答えはもううんこのだー、そして……これが始まりだ

「何言つてるの？ 問題は……」

何も聞こえなくなつた、田は一応の用心のため塞いでいたが、物音ひとつしない

「おはよ／＼わがこめす、 、起きてこますか？」

「ああ」

（やつぱりな……）

「早く起きてくれださいよ、着替えも済まして今日は忙しいのですから

「今日は何日だ？」

「西暦2012年1月1日の大変重要な日なのですよー、何を言つ出すのですかー！」

「ああ、そうだつたな、これから始まるんだつたな」

「そうですともー、頑張りましょうね」

「殺し合こを……」

二人は玄関の扉を開けた

まったく何が「終わりよければ全て良し」だ

まだ始まつてもねえじやんかよ

でもこのときは何も知らなかつた

この始まりは終わりへの一步だということを

#ひみつのゲーム

子供のころは少なからず、友達と遊んでたに違いない
その遊びは時代ごとに変わっていく、今までこれかじも

皆さんは、こんな遊びをしたことはあつただろうか？

よくテレビで出てくるアメリカの西部劇、ピストルを持ったガンマンと呼ばれる人が荒野で戦うといったストーリーである
それに影響されてか、手をピストルのようにして友達と撃ち合つたりした、今考えたらなんて馬鹿馬鹿しいことなのだろうか

あれから何年たつただろうか

「もう12月だね」
「寒くなつたね、寒さは女の敵だよね」
「あんな、じゃあなんでスカートなんてお前は馬鹿か
「ちゃんとストッキングはいてるから寒くないもん」
「寒くなつたら上着貸すから、無理するなよ」
「うん！ 優しいね」
「馬鹿、茶化すんじゃない」
楽しかつた、毎日こうして好意を抱いてくれる人の近くで笑いながら生きていくことに

「おはよー」
「おはよー」
「今日はもうぶらぶらですな、お一人さん」

「ば……ばか！」

「はいはい、俺らを茶化すんじゃないの、お前も真っ赤になつてん
じゃねーよ」

「ななななつてないよ」

「動搖してんじやねーよ馬鹿」

「馬鹿馬鹿言い過ぎー。」

彼の背中を叩きながら私は真っ赤になつた顔を隠すよつて早歩きを
した、別に好きでもないのに……

「な～にやつてんの？　またいじめ？　趣味悪いよお一人さん」

困つたときにはやつぱり親友だよね、私は彼女の後ろに隠れた
「俺は思つたことを口にしだだけだぜ、な～」

「こいつと一緒にするな、お前もいい加減にしりつて

彼らは本当に仲が良いのか悪いのか、

「……くしゅん」

寒さが身にしみる1-2月

「やつぱり寒いんじやねえかよ、ほらよ」

無理してスカートはいて来たのがやつぱり裏田に出た……のかな？

「わ！　い……いきなり投げるなつて……もつ

「ナイスキャッチ！」

登校途中の私たちが通行人の邪魔になつている」とは言つまでも無
かつた

なぜか皆同じクラス、よくある話だけど

「今日朝礼だつてさー」

「こんな寒いのにか？　頭いかれてるつて

もつすぐ冬休みつてのもあるけど、朝礼つて……古臭いよね

「外かな？　体育館かな？」

「さすがに体育館でしょ、私たちを殺す気じやなければ」

「あれせこくない？ 教師だけベンチコートみたいな着てるの」「分かる～火焚いてそのそばにいる奴もいるでしょ、ありえないよね」

生徒にとって先生ってどんな存在なのだか、ドラマのような熱血教師は私たちには向いてなさそうだけど

「なーに考えてんの？」

「ん？ なんでもないよ～」

顔が近いっつーの！ 彼は優しいけどあなたはなんか変に調子が狂つてしまつ

そして朝礼、やつぱり外だと、思いきや体育館ですることになつた、先生空氣読めてる！

でも……

「寒くね？」

「うん、寒い」

「外と変わんないじゃん」

「座りたくない」

文句しか聞こえなくなつた、体育館に決まつた時はあんなに喜んでたのに、まさか床がこんなに冷たいとは……

「早くおわんねえかな」

「今月から新しく赴任してくる先生を紹介します」

「誰だろ」

「興味ないね」

こんな時期に珍しい」ともあるもんだ、でももうすぐ卒業の私たちには、なんの関係も無い、あるのは教師と生徒といつ関係だけ

「それよつ今日はどうする？」

「なにが？」

「だつて退屈じやん、大学も皆決まつてるしセンター試験の奴らの
顔色うかがつて授業してるものなんだし」

授業はほとんど自習だった、時期が時期だけあつて私達終わつた組
からしたら退屈この上ない

だけど今日は違つた、新しく赴任して来たあの人人が原因だつた
「このクラスでもう大学決まつた人はどのくらい居ますか？」

私たちは手を上げた、

「どうせ隔離して別のことでもやつてろ、だろ」

小声であの人人がつぶやいてる、でもその通りだ、私たちは別の教室
に分けられてそのまま放置させられた

「なんだよこの対応」

「しょうがないよ」

「これ何のビデオ？」

各自おののの自由に行動し始めた、私は本読むだけ

「これ面白そだ、いい暇つぶしになりそ」

テレビのリモコンのスイッチを入れ始めた、これなんだろう、ハリ
ウッド映画かな古臭い映像が流れてきた

「それにして古臭いな」

「学校においてあるモノなんてこんなもんだろ」

それは一理ある、しおりを挿みテレビに目を向けた、荒れ果てた町、
いかにもハリウッドつて感じだった、どうせ銃の撃ち合いでも始ま
るのだろう

「どーせ、ピストルで撃ち合つて主人公が勝つ話だろ」

「そんなこと言わないでよ~」

彼女はこのゲームオに興味があるようだった、ちょっと意外

「なーに笑つてんの？」

「昔、男子がピストル『』ってやつてたな～って

「こんな感じか？」

あの人構えた瞬間……

「えつ」

「ちょっと……」

「おい……」

消えた

さつきまで、はしゃいでいた空気が凍りついた

彼女はその場に膝をついた

彼は言葉にならない顔をしてその場に立っていた

「何これ……」

意外にも私が一番最初に口が開いた

ゲームスタート

「痛たた、何が起こったんだ」
確かに俺はあいつらと一緒にビデオを見てて、ピストルの真似をした
瞬間、目の前が真っ白になつたんだよな
思ったより冷静な自分がそこにはいた、むしろ慌ても何の意味も
無い

「ようじや、All is well that ends well.
All is well.」

「All is well that ends well? どう

つかで聞いたことある英語だな

「突然ですがあなたの好きなものは何ですか?」

「あ?」

「これからあなたが活動していく上で重要なパートナーとなります
ので慎重に選んでください」

「どんなものでもいいのか?」

「はい」

「何でもいいのかよ……、なんか条件があつたほうが考えやすいのこ
逆に思いつかない

「時間をくれないか?」

「欲しいものですか?」

「いや、そうじゃなくて考える時間」

「時間でもいいのかよ……」

「あなたが欲しいものがこの後契約に則り説明いたします」

「モノじゃなくてもいいのか?」

「はい、しかし、ハンデがつきます」

それ相当の対価があるということか、面白い、

「じゃあ……ロボット」

「イメージしてぐだわー、あなたの頭の中のイメージビオツのロボットを召喚いたします」

イメージビオツのロボットを召喚いたします

「お待ちくだわー」

「なんだよ」

「ハンデをお忘れなく

「はいはい、完璧すぎるとダメなんだろ」

「……」

「承知しました、これより召喚いたします、ただいまより制限時間20分をお渡しします、召還されたものの言葉に従いゲームを行います、くれぐれもルール違反をせずにだけ言っておきます」

「スタート」

田を開いた、まつむらな空間に浮いていた感覚だった、田の前には俺のイメージしたとおりのロボットがそこにいた、かなりサイズが小さいが、これがハンデってことだらう

「よつこや、A 1 1 i s w e l l t h a t e n d s w e

1 1 . へ」

「何でも教えてくれるのか?」

「はい、契約の範疇でござりますが」

「「」の後どうなる」

「あなた様には、「」これよりピストルを使った、殺し合いをしてもらいます、」

えつ……

いまこいつ、なんて……

「殺し合い？」

「これよりルールを説明いたします、後で本をお渡しいたしますが時間が「」ございません、簡単に説明いたします」

目の前に手帳が現れた

A 1 1 i s w e l l t h a t e n d s w e l l · 1 0 ケ 条

- 1、これより寿命をかけたガンバトルを行います。
- 2、ゲーム開始前に試し撃ちを行つて自分のガンの種類を把握してください。
- 3、弾の上限は寿命です、パートナーにお聞きください
- 4、心の臓、すなわち現実世界の死が、このゲームのゲームオーバーです。
- 5、相手を倒すと倒した人が現在持つている弾数＝寿命をゲットできます。
- 6、パートナーは基本戦闘には参加できません、生かすも殺すも自分で下さい。
- 7、パートナーは「」ちらの規約内ならどんなことも出来ますしお答えします。
- 8、ゲーム終了は「」ちらがお知らせします、終わり次第現実世界に帰れます、
- 9、なお、ガンの銃弾は大変特殊な物の為、必ずパートナーにお聞きください

10、

なんだこのゲームは……、10の白紙も気になるが後で聞こえ
今は生き残ることが大切だ

「残り10分となりました、ピストルを配布いたします」

小さな口ボットから紙をもらつた

「あなたの寿命は70です、したがつてガントタイプノーマルです」

70……、そんなもんか、

「短いとなんかあるのか?」

「はい、弾数が少ない=強力となつております」

「俺はずっとこのままか?」

「いいえ、奪うことも出来ます」

ピストルを構えた、重い……

「ここでの発砲はゲームと関係ありません、さあ練習しましょう、両腕で持つて反動に耐えまずはあれを狙つてください」
目の前に的が出てきた、両腕で持つてつと……

「ひつか?」

「そのまま引き金を引いてください、連射可能です」
見事的に命中した、これなら戦えそうだ

「そこに書いてあつた弾のことなんだが」

「はい、1説明いたします、この弾は如何なる物も貫通いたします」

「マジ!?」

「ですが、条件がござります、人間が直接あるいは、間接的に触れているものに限ります、ですので防弾チョッキなどは着っていても効果がありません」

「そ、そうだな、何か有効な活用方は無いのか?」

「プレイヤーに教えても良い活用方は、これだけです
モニターが出てきた

「『』のように壁に触れていればガンで撃つことによつ、その建物全てを貫通いたします」

「でもさー、」

「はい、思つてこりひしやるとおり敵にも同じ」とが言えます、『』注意ください』

残り1分

「これよりゲームスタートです」

「お前は何が出来るの?」

「あなた様がイメージしたとおりです、戦闘にはこの通り小ささを
て参加できません、肩に乗らせていただきます」

「オッケ～面白くなつてきたぞ、ぜつて～生きてあいつらに血漬け
してやる」

目の前のまつせらとした景色が変わり、目の前に映るのはコンクリ
ートの地面と無数のビル、

「相手はどのくらいいるんだ?」

「わざとレーダーで確認しただけで100人います」

多い、でも面白い、ワクワクしてきた、死ぬのは怖いが死ななければ
良い、絶対生きてかえるそれが第一条件だ

「俺は『』の戦い、敵をなるべく倒さない、逃げて逃げて逃げ勝つ、
逃走経路は頼んだぜ」

「御意」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3238z/>

All is well that ends well.

2011年12月16日20時55分発行